

大政奉還百五十周年記念プロジェクト

～京都市～

幕末、京都には全国から国の将来を憂う人々が集い、議論し、一人一人の熱い思いが重なり合い、やがて大きなうねりとなり歴史を動かしました。

平成29(2017)年は、武家政権が終わりを告げ、新しい国づくりへの転換期となった慶応3(1867)年の「大政奉還」から150年の節目を迎えます。

京都市では、この記念の年に「大政奉還百五十周年プロジェクト」を実施し、当時京都で活躍された先人の歩みを再評価するとともに、幕末維新をテーマに京都の魅力を発信します。



後藤象二郎 (ごとうしょうじろう)



©港区立港郷土資料館

大政奉還の立役者の一人に後藤象二郎がいます。象二郎は天保9(1838)年、土佐藩士後藤正春の長男として誕生。家督を継ぐと土佐藩参政であった叔父の吉田東洋に抜擢され、藩主山内容堂(ようどう)の信任も厚かったとされています。東洋が土佐勤王党により暗殺されると失脚しますが、その後、前藩主の容堂が藩政を掌握すると大監察となり、土佐勤王党の弾圧を行いました。その功績で参政となり、慶応2(1866)年、洋船の購入のため長崎へ行った際に坂本龍馬と巡り会い、海外貿易や開港問題で意気投合。象二郎は龍馬の運営している亀山社中を「海援隊」として、藩の援助を受けられるように取り計らいました。

慶応3(1867)年、龍馬発案とされる大政奉還案を容堂に提出、これを土佐藩の藩論とし、「大政奉還建白書」として幕府に提出しました。同年10月13日、これを受けて将軍の徳川慶喜が大政奉還を表明しました。

明治新政府では黒田内閣や松方内閣で逓信大臣、第2次伊藤内閣では農商務大臣など要職を歴任。明治30(1897)年死去。享年60歳。墓所は東京都港区の青山霊園。

後藤象二郎郎寓居(壺屋)跡

この地は後藤象二郎が幕末の京都で常宿とした醤油商「壺屋(つぼや)」のあった場所であり、右の京都市の駒札が数年前までは立っていました。

この地に平成30(2018)年春にオープンするホテルには、この後藤象二郎寓居跡を記念したギャラリーが併設され、それに合わせて右の駒札も復活します。

(文責：(株)都市ガバナンス研究所)

後藤象二郎郎寓居跡

このあたりは、土佐藩士であり、後に明治新政府でも活躍した後藤象二郎(一八三八〜一八九七)が京都に滞在中、常宿とした醤油商「壺屋」があった所である。

後藤象二郎は義叔父である吉田東洋の塾で学び、安政五年(一八五八)には東洋の推挙で幡多郡の奉行職に就いた。文久二年(一八六二)東洋が暗殺され、武市瑞山(半平太)らの土佐勤王党の力が大きくなると、政治の一線から身を引き、江戸で西洋の学問を始め航海術を学んでいる。元治元年(一八六四)以降、再び藩政に返り咲き、土佐勤王党の弾圧をはじめ、武市を切腹に追いやり、前藩主の山内容堂の信任を得るところとなる。慶応二年(一八六六)には参政職に、翌三年には家老職に就き、土佐藩の若き重臣となる。

坂本龍馬の船中八策の考えに強く感銘を受け、山内容堂を通じて将軍 徳川慶喜に大政奉還の必要性を説いた。

明治維新後、新政府では盟友である板垣退助らと共に自由民権運動にも力を注ぐ一方、逓信大臣(郵便や通信を管轄する)や農商務大臣など政府の重職にも就いている。

京都市